作庭実習「森をつくる」9

環境共生園について（3）

岩村　伸一 [1)]

Seminar in Garden Design, “Creating a Forest” 9：On Kyoseien Garden（3）

Shinichi IWAMURA

抄　録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は，作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は，体を使って空間を変えることに取り組みます。2008 年度も附属環境教育実践センターの環境共生園をその舞台としました。今回は共生園に入れる苗木について報告するとともに，この年おきたちょっとした出来事について述べています。

キーワード：庭，森，環境共生園，苗，みる

「こらっ　シンボウ。ここで何しゆうぜよ！」。突然, 思わぬ方角から大きな声が響きました。群青色の大男，顔は煤で黒く，やたらと目と歯が光っています。

「秘密基地を造りゆうがです。」と言って，その場に固まってしまいました。

「おまんら，先生から，入ったらいかんと言われちゃあせんかえ…？」。そんな言葉を聞くがはやいか，転がるように柵をすり抜けました。操車場を隔てる柵は，古い枕木を間隔をあけて立て，それを鉄条網でつないだようなものでしたから，小学生には無いようなものです。それに大人たちも南側の駅の改札への近道として，そこかしこから出入りしたものでした。

当時の国鉄機関区職員は，体格の良い若者が多かったように思い出します。昼休みのサイレンと共に，次々と柵を越えては群青色の作業服のままで，炭滓広場（当時，僕らは駅裏の埋立地をこう呼びました。）で野球やら，なかには上半身裸になって相撲なんぞをはじめます。それを横目に眺めながら，ドブ川沿いに歩いて手ぶらで空き地にたどり着きました。基地の材料をあさりに機関区に入ったのでしたが，これではさっぱりです。

「シンチャン，秘密言うたらいかんぜ！」。しもうた，こんな時にはタカヒロからいつも指摘が飛んでくる。「第一, 秘密基地はおかしいやろ…」。「言われん。言われん。」は少し遅れたカークンの同意。これでは一応一学年年上のリーダーとしての面目は微塵も無いのです。ただただうな垂れて土管の基地に滑り込むしかありませんでした。

1）京都教育大学

高知駅の北，操車場から蓮沼までの間，あちこちに広がる空き地が，この三人組の世界だったのです。意味や用途から自由である空き地であるからこそ，彼らの世界であり得たのです。が，同時にそこには多くの眼差しがありました。様々な視線の交差が彼らを見守っていたのです。そんななかだからこそ，縦横に楽しみ駆け抜けることができたのだと思います。

2006 年度の作庭実習から，授業最終回は，その年度に造作した野筋や石組の周辺を整地し直し，全員で手分けして，小さなポットで育った苗木をたくさん，共生園の敷地全面に散らすように定植しています。それまでは，ある程度育った株を購入し，通常の庭造りのときに行われるように，多量の水を使って丁寧に根と土を馴染ませ（水決めと呼ぶ技法です），支柱もしっかりと施していました。しかし，こうして植えた木がこの場所の条件に合わなければ，結局枯れてしまいます。この広い敷地が相手の場合，この繰り返しは無駄が多いと判断しました。今でもこの場所にこの木を入れたいとはっきりイメージした場合はいくらか育った株を手に入れて植えますが，多くはポット苗をばら撒くこの方法を採るようになりました。この場所の過酷な条件に耐え，しかも土に合った苗だけが生き残り育っていくだろうと願っています。

2006 年度（2007 年 1 月定植作業）は『環境共生園について（2）』にも書きました[(1)]が，イロハモミジ 10，ヤマザクラ 10，クヌギ 12，コナラ 12，アラカシ 6，シラカシ 6，スダジイ 10，ツブラジイ 10，ヤブツバキ 20，ソヨゴ 10，トチノキ 2，シバグリ 3，シャシャンボ 2 を植えています。庭をつくる現場で樹木を植える場合，その木の一番根（多くの根の中で一番上にある横に張り出した比較的大きな根をこう呼びます）と地表の線を揃えるようにその鉢（地中から掘り出され土が付いたままの根の部分の塊）を埋める深さを決めます。あまり深く植えると根が伸びにくくなって木の勢いが弱り，場合によっては枯れることがありますし，浅いと

今度は鉢そのものが乾燥したり，ときには凍ったりして枯れてしまうことがあるからです。この年の作業では，通常の位置を指示して植えていったのですが，少し甘かったと反省しています。個人の庭の場合，寒いようだと根元をわらで覆ったり，乾いたと気がつけば水をやったりという後からの手当てが可能なのですが，この共生園の場合それはなかなか難しい。冬場の凍てつきや，夏場の乾燥にはかなり厳しい植え方だったように思います。

2007 年度（2008 年 1 月定植作業）に購入したのは，納品書の内訳によると，シバグリ 3，サワグルミ 2，ヤマハンノキ 3，シロダモ 3，ナギノキ 3，タブノキ 3，ツノハシバミ 5，アカシデ 3，ヤシャブシ 5，アキグミ 1，ヤマモモ 3，ナラガシワ 3，カヤ 3，ソヨゴ 5，ガマズミ 3，アカマツ 10 となっています。この年は指示を変えて，通常より 3 cm ほど深く植えるようにし，しかも木を植えた地点を中心に周囲を少し低くし，お皿のような地形（水鉢などと呼びます）にして，そのあたりに降った雨がその木の根元に集まるようにしました。しかし，この程度の対策で苗木の定着率が大きく変わることは期待できないのかもしれません。

実際のところどれだけの苗がこの場所に定着しているのでしょうか。その確認はもう少し時が経ってからにしたいと考えています。時間に限りがあるなか，参加者それぞれが目まぐるしいほどに次々と植えるので，どこに何の苗木を植えたのかの確認もできていません。なかには，その日の作業時間内に定植できず，消防学校との壁際に切り石を並べ，壁と石の間に真砂土を投げ入れて，仮植えし放置しておくこともあります。なんという無責任なやり方だろうと思うこともあるのですが，ここでこの木が大きくなるといいなと思うだけで先々ほとんど何の手助けもしませんから，おそらく多くの苗が夏の日照りと繁茂する雑草に負けて枯れてしまっていると思われます。

特に前年，池の北側に意識して集めて植えたソヨゴは，弱い苗であったのか全滅していました。今年は，もう少し根元がしっかりして勢いのありそうな葉色をした苗木を 5 本，同じ場所に，これらがだめならここはソヨゴには不向きな土なのだと思いながら入れました。またこの年，土を大量に運び入れ盛り上げた南西角の丘の一帯は，将来のアカマツ林を願って，10 本の元気な苗を散らし，新しい真砂土の山なので，苗を支えるために丁寧に青竹で支柱を施しました。さらにその横に，ガマズミを配し，いくつかの丸い石もあしらって，完成。この年度の大きな成果だと考えています。30 年後（？）には，皆で集まって松茸狩りをすることになりました…。

3 月の中旬，暖かい感じの雨の一日。久しぶりに共生園を眺めようと思い立ち，夕刻，仕事を終えて立ち寄りました。やっと春めいてきたところで半年間の成果を見直してみようとでも思ったのだったか…。地面のところどころに穴があってそこに雨水が溜まっている。こんなに整地が粗かったのかと目を凝らすと，真砂土の明るい茶色とは違う黒い土の塊がいくつか目に付きます。ポット苗の根の塊，鉢です。定植したはずのソヨゴが転がっていました。予想にはなかったからでしょう，しばらく眺めてしまいました。周りを見回せばソヨゴだけではなく，いくつもの苗が横になって雨に濡れている。なかには，ひょろっとした幹の部分を持ってハンマー投げよろしく投げ上げたのか，割れて崩れてしまい根がむき出しになったものまであります。環境センターの道具置き場へ走り，スコップと箕を持ち出しました。苗を拾い上げては近くの水の溜まっている穴に戻し，箕で土を運んでは被せます。捩じ切られた幹は鋏で切り直し

そこから出るだろう次の芽に期待するしかありません。いつ抜き取られたのだろう，根が乾燥してしまっていたらもう手遅れかもしれない。そんな気がかりを持って体を動かすからでしょうか，小雨とはいえ雨中の作業は思うようには進みません。なんとかそのあたり一帯を修復できたと思ったときはもう薄暗くなり始めていました。

実は前年度にも一度，子どもの遊びで植えたばかりの苗木が抜かれたことがあります。定植作業を終え，道具を片付けて帰ってくると，植えたはずの根が地表に出ている。しかも等間隔に並べた直線で小さな四角を描き，その中に子どもがひとり座って屈託のない顔でこちらを見ている。ぎょっとしました。もうひとり，両手に鉢を下げた子どもが走ってくる。「こらこら，これは今植えたものやないか。」と走り寄ると，「おっちゃん，入り口はそっち。この草，すぐ抜けるんやで。」と得意そう。なんだか拍子抜けしながらも，これらが植えたばかりの苗木であり将来根を張って大きな樹木になることを説明して，引き抜いた穴に一緒に植え戻しました。

それと今回とは，おそらく同じようなことなのだろうけれど，随分違った印象があります。なんだか荒んだ感じがするのです。いやな胸騒ぎのようなものでアカマツを植えたあたりに目をやりました。マツが変な形に立っている。近くに寄ってマツとガマズミが抜かれているのを確認しました。支柱をシュロ縄で結わえ付けたまま引き倒されており，いくつかの苗は，支柱が抜けなかったのかそのままで，根の鉢だけがあらわになっている。まるで，首を縄でつられてぶら下げられたかのように幹を斜めにして立っているのでした。道具を取りに戻り，再度，雨の中での作業。暗くなった中で，今度は支えの補修もありますから，少し丁寧さが要求される作業です。しかもこんなときに，土砂降りになったりするものです。3 月の雨は決して暖かなことはありません。「なんでやっ」と声に出してしまいました。

すっかり風邪を引いてしまい，それがやっと楽になった 3 日後。またこの場所で，2 本のアカマツ，支柱ごとブロック塀へ投げつけられているものと，支柱の竹が欲しかったのか，シュロ縄で結わえた幹の中ほどでへし折られ抜き捨てられているものを見つけ，それぞれ手当てをしました。先日のものと同じ時に受けた被害なのかその後再び受けた被害なのかは不明です。が，鉢の部分は乾き始めている様子。バケツで何杯も根元に水を運びます。結局，この新しい丘に導入したアカマツの苗 10 本とガマズミ 3 株は，全部植え直すことになりました。生きのびることができるでしょうか。ただ，むなしい気持ちとどうしようもない悔しさが募りました。

どういう事情があるにしろ，この，何かに対する「腹癒せ」であるかのような行為は，以前の小学生の例とは同じではないと思われます。これらのアカマツは手間をかけて支柱が施され，大切に植えられていたものであります。誰が見てもこのことが明らかである以上，その手間と想いを踏みにじろうとする意図が，それが目的ではないかもしれないのだが，そこには明らかにあります。そう感じられます。作庭実習のメンバーからは見張りをしようとか犯人を見つけ出そうという意見も出されました。しかしそれは難しいだろうし，わたしたちはいつもここに張り付くわけには行きません。いたちごっこに付き合うことはできないのです。それに，この荒んだ状況にある者を見つけたとして，わたしたちに何ができるのかは甚だ疑問に思われます。

被害を受けたくないという方向だけから考えると，この場所を，ひとが立ち入ることができないように，閉じてしまうということも考えられます。実際そうなってしまった例はたくさん見受けられるようです。が，このわたしたちの共生園がフェンスに取り巻かれた空き地になっ

ているのを見たくはありません。ひとを排除する事は避けたい。それに，フェンスがあったとしても入る者は入ります。この方法では，止めたいと思う者に対しての効果はあまり望めないものです。だいいち，前々回の報告では「この環境共生園は，常に開かれた，すべてに通じる道を持つ，人々の往き来する場でなければなりません。」と言っています(2)し，前回の報告では「その場所の条件（水，光，土などの自然条件だけではありません。近所の子どもたちにはこの場所は格好の遊び場ですし，犬の散歩にもおそらく最適です。）に適ったものだけが根を張り生き抜くことになるでしょう。」とも書いている(3)のです。しかし，ここまでの悪意のようなものを見せ付けられると，無力感と情けなさばかりが残ってしまうようでした。どうしようという思いばかりが堂々巡りをしてしまいます。

とうとう立札を持ち込みました。4 月になり 2008 年度に入ってすぐのことです。厚手のベニヤ板の上辺を少し長めの角材の端に揃えてネジ止めし，反対端をナタで尖らせ，全体を白ペンキで塗りました。その上にわたしの手書きで硬いカタカナ文字が並んでいます。言葉ごとにいろんな色を使い, 目立つように工夫したつもりです。その上から防水のため, アクリルメディウムを何層も塗り重ねました。なかなかの力作だと思います。共生園に入って遊んでいるひとに読んで欲しかったので，横の道沿いではなく，あえて中央部分である段々畑の上段に立てました。簡単には抜き取れないように，掛矢を振り上げて杭をしっかりと打ち込んであります。

ココデ遊ブヒトヘ
ココニアル木ノ苗ハ，将来，森ニナルコトヲ願ッテ大切ニ育テテイルモノデス。枝ヲ折ッタリ根ヲヒキヌイタリシナイデクダサイ。トテモツライ。
石垣・石組ハヒトノ手ニヨッテ時間ヲカケテツクラレテイマス。崩サナイデクダサイ。

京都教育大学森ツクリ

苦心した文面です。毎回のことですが共生園に行くと，まず犬のフンを地中に埋め，それから作業を始め，作業が終わってからゴミ拾いをすることにしています。紙類などの自然物でないものやプラスティックなどの土に還らない物を持ち帰るのですが，お菓子などの包装やジュースの空き缶だけでなく，タバコの吸殻や時にはカップ酒のふたや空き瓶まで転がっています。これらの捨てられた物から考えても，この立札の対象が小学生とは限らないので，ここでの「遊ブ」にはかなり広い意味を込めています。また，納得してくれる相手ばかりとは限りません。反感を買い，立札そのものも攻撃の目標になるかも知れないのです。なるべく相手に平明に伝わるようにと言葉遣いにも工夫の跡が感じられます。はたして, 効き目はあるのでしょうか。しかし，効果への期待はともかくとして，立てなくてはいられなかった。周りのひとに向かって，この場所の説明をしておく必要があると，強く思ったのです。

その後，転がされている苗を目にしてはいないように思います。いつも，犬の散歩に来られ

るおばさんが,「子どもが悪戯しているようだと注意するようにしているよ。」と話してくれました。しかし，この立札が有効に働いたのかどうかの判断はできませんでした。まもなく，この地面の下にあった草々が芽を伸ばし立ち上がって，地表を覆い隠し始めました。足元が見えなくなるとともに，ひとは寄り付かなくなります。夏の間，この場所は雑草に覆い尽くされ，立札も盛り上がる草の中に消えてしまいました。苗木も呑み込まれて，どこにどう植えたのか探すこともできないほどです。この眩しい緑の海の中では，新たに連れてこられた苗木には過酷な，真夏の生存競争が展開しているはずです。

秋に入り 2008 年度の作庭実習がはじまります。今回の参加者は延 16 名。丁度良い数だと思います。共生園での作業に着手したのは 10 月 30 日からでした。早速この草の海に分け入ります。今年の草刈も去年以上に苦労する印象です。なんといっても，アレチヌスビトハギが全域をおおう勢いですし，前回よりも根は確実に大きくなっている。そのほかの草も全体的に野太くなっているように感じられました。このままでは前年度以上に草刈に時間をとられてしまいかねません。そこで, 作庭実習 OB を中心に組織（？）されている作庭グループ『培土園』（代表・山内朋樹）に依頼し助力をもらいました。あらかた地面が見えるようになったのは秋も深まる 11 月の末でした。

例のソヨゴは一本だけ残っていました。多くの苗木はまた何処かへ行ってしまったようです。気がかりだった南西端の丘の部分は，そこに入れたすべての苗が根を伸ばし，しっかりと生きています。心なしかアカマツは大きくなって見えました。ここはこれで，まずは一安心です。

立札に話を戻しますが，いくらか色が褪せてはいるものの，今も立っています。この秋は足下にヒガンバナが咲くのを見ました。おそらく，もうしばらくは風雨に耐えるように思われます。が，その文面を見る度に，恥ずかしい思いが募るようになりました。ここに立てて，この森を説明するのだと考えたはずなのですが，実際は，想定される森を価値付け，森をつくる立場を持ち上げるかのようです。自分を疑おうとしない，つくる側の傲慢さのようなものまで伝わってくる。つくることの意味を固定し，周りにもそれを押し付けようとしています。ここにある文は，おそらくあの時点のわたしの気持ちの表明ではあったのだと思いますが，この場所の説明ではありません。つくる者の持つ想いや意味も崩れていくはずです。どんどん組み替えられなければならないでしょう。この一連の作庭実習報告のなかで何度も繰り返すようですが，この森は訳のわからないものであり，その都度意味が立ち上がるような存在であってほしいのです。この場の持つ流動性のようなものを伝える立札は可能なのでしょうか。きっと，読むたびに意味を変えるような文章，訳のわからない文，単なる言葉の集積のようなものになってしまうのかな。それでも今立っているものより，いくらかはマシであるかも知れないと思うようになりました。

鳩の群れを見ています。庭仕事の合間，一服の時間です。この群れには白い鳩が二羽いるはずなのですが，今日は一羽見当たりません。さっき，この森の北の方，かなり鬱蒼としてきたあたりにある石組に羽が散らばっていたけれど，さては猫に食われたかと眼で群れを追っているのです。雑草を刈り取って以降，いつ来てもこの鳩の群れに会います。起伏のある地表のあちこちを，群れで移動してはひっきりなしについばんでいる。ひとを見ると近寄ってきます。先日も草刈の後，作業服の全身についたひっつきむしを道路の上に落としていると，やって来てアスファルトの上をつっつきはじめました。ヌスビトハギは紡錘形を押しつぶしたような殻を持っていて，それが服などにくっつくのだけれど，そのなかに小さい種が入っていて，どうやらそいつが狙いのようです。他にもツルマメの種も無数に散っているはずですから，この場所にはいくらでも彼らの食料があることになります。なるほど群れが居付くはずです。ああ，白いもう一羽も山の向こうからヒョコヒョコと姿をあらわしました。

それにしても，どうしてこんな立札を持ち出すことになったのだろうと改めて考えました。アカマツの林が踏みつけられたことに，苛立ちを感じ残念に思ったからなのですが，アカマツを擬人化しその被害に同情したということはないわけで, 害を被ったのが我々だと感じたこと，皆で力をあわせ丁寧に仕上げた作品が踏み躙られたことが, おそらくその理由なのです。普通，何かをつくろうとする場合，絵を描く場合も同様なのですが，こういうふうにしたいという設計図を持ってことにあたります。そして結果がその図からはずれていくことほど不満を感じることはない。まして，はずされたとなると，失われたものをとても残念に思うことになり，怒りのようなものまで感じていたのでしょう。そして，その腹癒せのようにして，この立札ができたのです。そう考えると，あまり褒められたものじゃないことになります。

この場所にかかわるようになったのは 10 年程前ですが，その時からここに大掛かりな造形的構築物をつくろうとは考えませんでした。わたしの作庭での経験を基につくり上げようとする思いと，これ見よがしな作為的なものはなるべくつくるまいとする思いとを半ばにしてスタートしたのをおぼえています。それでも，この広い場所を環境共生園というひとつの装置に

変えるのですから，造園者として，それなりの意図，こうしようという考えを持たなければならなかったのは，当然の成り行きだと思います。そしてその考えを参加した学生に伝え，彼らの，いや，わたしたちの作業の集積として，汗の賜物として，共生園という領域をこの敷地の南端にまで広げてきたのです。作庭実習で掲げた「森をつくる」に，こうした意図が重なっていたことは間違いありません。そうした意味では絵は完成に近づきつつあります。つくる者の価値観でもってつくってしまうことを目指し，この場所を「思うようにしてきた」と言ってみることも可能だと思います。これは，この場所に作用する意識の持つ視点，つくる者の視座に立ったものごとの見方です。しかし，この言い方だけでは，この場所の変遷を正確に言い表したことにはなりません。

この場が変化し「なるようになってきた」というのが，おそらくもうひとつの客観的と思える言い方ではないでしょうか。この場所自体に視座を移して考えてみます。元の公務員宿舎時代からの土，附属養護学校（当時）からの粘土交じりの土，附属京都中学校の工事現場から出た砂礫土，すぐ横の附属高等学校から運ばれた土，それに少しずつ買い足された真砂土がここに積み重なっています。それぞれの土の持つ属性がひとつの条件です。それに加えて，ここに注がれる陽光，降った雨水，それに通り抜けていく風なども，条件として重要でしょう。そこへ様々なかたちでやって来て根を張ることになった草々と毎年のように持ち込まれたいくらかの樹木や苗木。それらの持つ生命。そんな重層がこの場なのです。ここで働いたわたしたちの労力は加えられたひとつの作用ではあるのだけれど，この視座から眺めると，ここにやって来て苗を引き倒したひとも，散歩に来たひとも犬も，身を伏せて獲物を狙う猫も，食事にいそしむ鳩も，ネズミも虫もミミズも…。おそらく横並びで，この場を訪れかかわる一群ということになってしまいます。こうなるとどうやら，ひとの持つ意図や想いも頼りないものとして見えてきます。このようにしてなるようになり，可能なものだけがこの場に居続けているのです。言い換えると，ここに10年という時間が流れたということなのかもしれません。私自身のうちらも変わってきました。ある種の崩落のようなものが感じられます。こうありたいという意図はいつの間にか遠くなり，肩に入っていた無用な力は少しずつ消えていったように思えます。結局のところ，思うようにはできなかったわけで，それでもなるようにはなってきたと考えるようになりました。

ここを「みること」。そのことが肝要なのではないかと思っています。絵を描く場合も，設計図に近づけようとする以上に，その時々で自分の絵がどうなっているかをしっかりとみる必要があります。場合によってはそこから予定とは違う方向へズレて行かなければなりません。そんなふうにこの共生園の制作においても初めの計画とはどんどんズレてきました。このことはつくる者の視座に属する「みる」ということでもあるのですが，今，言おうとしているのは，場そのものの視座から場自体をみるということです。この場所からは様々なモノを見つけることができます。いろいろなコトを楽しむことができるのです。まだまだ発見することがいっぱいあると思います。それだからこそここは，訳のわからないものであり続けることができるのではないでしょうか。「森をつくる」ということは，この場をあるがままにし，みつづけるということであるように思われます。

その気持ち，その態度が，私の少年時代に広がっていた空き地にあった眼差しであるように

思われます。いつくしむかのように，その空間に視線を投げかけている人が確かにいたのだと思います。今回，苗木が引き抜かれ，幹が折られていることに気がついたとき，わたしにできることはひとつしかなかった。ここをみることを「森をつくる」ことの方法にしようとする者にとって，おそらく選べることはひとつしかなかったはずでした。抜かれたら植え戻す，折られたら切り直す。それ以外にわたしがするべきことは何も無かったのです。

作業を終え，道具を片付けて，さあ帰ろうというところへ，西日を受けて自転車が三台，飛び込んできました。三人の小学生。そのままサンゴジュの根方にその乗って来た自転車を投げ出すと，歓声を上げながら今ならしたばかりの真砂土の丘へ駆け上がって行きました。ひとりひとりがこの作業跡をあっちこっちと検分しては足裏で感触を確かめているようです。実に，勢いがあります。

「あれっ，ここにあった平たい石は…。」とそのあたりを探しているのがいます。近寄って，どうかしたのかと訊ねました。思わぬ返事が返ってきます。

「秘密基地を作るんや。」

急に風が吹き込んだかのように感じました。怪我をせぬようにと言い残して帰路に着きました。今日入れた真砂土は，彼らがいい具合に踏み固めてくれるでしょう。

註

（1）『作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について（2）』
京都教育大学環境教育研究年報第16号，P119

（2）『作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について（1）』
京都教育大学環境教育研究年報第15号，P97

（3）『作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について（2）』
京都教育大学環境教育研究年報第16号，P119～120